

『ジョーカーは愛を囁く』

著:大槻はぢめ

ill:香林セージ

EX商事株式会社。主に文具用品を扱う大手商事会社である。

従業員数五百余名。全国に支店を持つ、一部上場企業だ。

その本社にある営業一課のオフィスは、十階建て本社ビルの五階にあり、ワンフロアの半分を占めていた。

隣接するのは営業二課。映画やドラマであるように一課と二課は犬猿の仲——などではなく、営業成績もさして差がない、ただ人数の調整上二つに分かれているだけ、というもので。

いたって平和で平凡な営業部なのである。

その一課のフロア奥、壁際の隅にある机で、男が一人、その黒髪を指先で掻きながら目の前のパソコン画面をしかめっ面で見つめている。

「あー…わかんない……」

どうやらこの類(たぐい)の機器が苦手らしい男は、ハアと盛大なため息を一つ漏らした。

少しか長い前髪は、彼のトレードマークでもある太い黒縁眼鏡の上半分を隠していた。少し俯くだけで、もう彼の目が見えないほどだ。

もっとも、いつも猫背で顔を伏せているから、彼の顔をはっきり見た輩(やから)は少ないのだが。

手(て)櫛(ぐし)で整えただけの髪はあちらこちらに跳ねており、寝癖もひどい。

「ちょっと。誰がああのお茶運ぶのよ」

そんな彼の座席後ろにある給湯室から、営業部で事務をしている女子社員が三人、眉を寄せながらそう口を開いた。

「私はイヤよ。昨日運んだんだから。今日はミカが運びなさいよ」

「ちょっと、冗談はよして？ 私は一昨日運んだんだから。今日はユカリに決まってるでしょ」

彼女らが口を揃えてお茶(ちゃ)汲(く)みを嫌がっている対象は、そのメガネの男だった。

彼女らの言葉を聞いているのか聞こえていないのか。当の本人はまだパソコンの画面を見つめ、「あー」とか「うー」とか、小さな呻き声を漏らしていた。

画面には自分の営業成績を記入する表が開かれている。

ただ数字を入力し、ボタン一つ押せばすむだけの話なのだが……とにかく彼はパソコン音痴で、キーボードの文字配列もいまだ一つも覚えていなかったりもする。

今朝、朝礼を終えてから、昼下がりの今まで。一度も外へ営業に出向くこともなく、彼はパソコンの前でずっと唸(うな)っているのである。

よれよれのスーツ、くたびれた靴。散らかった机は、先ほど無理やりラップトップのパソコンを開くため物を押しやった形跡があった。

要するに、彼は見るからにモテなさそうな男で。モテないどころか、OLたちがお茶運

びを拒否してしまうほど、嫌われていたりもするのだった。

「見てよ、アレ。スーツが皺だらけ！ 誰も何も言わないのかしら」

「言ってくれる相手がいないんじゃないの？ 女、いそうに見える？」

「絶対に見えない!!」

さんざんな言われようである。しかし、やはり彼はまったくその陰口が耳に入っていないのか、聞いても気にしないのか。

突然、猫背だった背を伸ばしながら、彼がググッと両腕を真上に上げて伸びをすると、女子社員たちはビクッと肩を竦(すく)めて給湯室の奥に姿を消した。

「あー、もー、肩凝(こ)った。休憩、休憩」

彼——佐(さ)藤(とう)太(た)郎(ろう)・二十六歳・独身——は、「よいしょ」とさらにモテナさそうな口癖を口にしつつ椅子から立ち上がると、まっすぐにオフィスの出口へと向かった。

オフィスを出てすぐのところに、ちょっとした喫煙室があり、その隣には飲み物の自動販売機があるのだ。

太郎は煙草を嗜(たしな)まないもので、喫煙室とは縁がない。しかし、すぐに喉が渇く体質なのか、自動販売機はよく利用していた。

よって、女子社員が運んでくるお茶など、さして意味はない。一瞬喉を潤す程度にしかならないのだから、むしろ淹(い)れられなくてもいい。彼はそう思っていた。

「はあ…落ち着くなあ…」

廊下の一角、自動販売機の前は二畳ほどのスペースがあり、廊下との仕切りはないものの、簡易的なベンチが一つ置いてある。

彼はそこに腰掛けると、先ほど自販機で購入したコーヒーを一口飲み、ホッとしたため息とともに、そんな言葉を呟(つぶや)いた。

太郎は人ごみが苦手だ。気分が悪くなるとか、そういう『苦手』ではない。

ただ人付き合いが苦手なのである。

できることならあまり人と関わりなど持ちたくないと、常日頃から思っている。

それなのに『営業』職。思いきり他人と関わる仕事ではないか。

太郎は暫(しば)しの『孤独』を堪能しながら、ぼんやりと天井を見上げた。

何もないそこをただジッと見つめていた漆黒の瞳が、またもやため息とともに疲れた眼差しになる。

「よりもよって『営業』って。父さん、僕のこと、何もわかつちやいないんだよなあ」

要するに。太郎はこのEX商事に入社する折、父親のコネを使ったわけで。

実は、中途入社したばかりの太郎。どうしても仕事が見つからず、幼い頃に母親と離婚した父を頼ったところ、こちらの会社を紹介してもらったというわけだ。

たまたまその時に枠が空いていたのが、今太郎が所属している営業一課だったのだ。

「できれば、こうさあ…。よくテレビとかで見る、あってもなくてもいいような部署で、地下にフロアがあったりして、よその部署の荷物とか置かれているような部屋で、一人孤独に電卓叩くとかさ。そういうのがよかったよねえ…」

長い愚痴だ。少々彼の妄想も入っている文句をブツブツと愚痴らしく呟いた時だった。

「天井に何か見えるのか？」

不意に声をかけられて、太郎はビクリと細い両肩を跳ね上げながら視線を戻した。

すると、廊下から太郎へ近づいてくる男に気づく。
「げ……。狩(かり)谷(や)課長」
「よお。のんびり休憩か？ いいご身分だな、おい」
「う…」
にこやかな笑みを浮かべているが、目が笑っていない。しかも言葉にはトゲだらけだ。
太郎は残っているコーヒーを慌てて飲み干すと、そのまま立ち上がり紙コップをゴミ箱へと捨てた。
「朝からパソコン触ってまして……。ちょっと肩凝ったんで、息抜きデスよ」
太郎は相変わらず顔をやや伏せたまま、ボリボリと頭を搔いてそんな言い訳を試みた。
日本人男性の平均身長はあるのだが、それ以上に長身の狩谷の前では、まるで叱られた子供のように見える。
「相変わらず苦手なようだな、パソコン。今時、パソコンぐらい使えないと、仕事にならないのだが」
「すみません……」
小さな言葉のトゲが、容赦なく太郎に降りかかった。それをどうにかやり過ごすには、ただひたすら『すみません』を繰り返すのが上等。ここ数ヶ月で太郎が学んだことだった。
「よし、わかった」
軽く頭を下げていた太郎は、頭上で聞こえた狩谷の言葉に少しだけ眉を寄せた。
何がわかったのだろうか。疑問に思い顔を上げる。そこに見えたのは、片方の口角を若干上げて——つまり、ニヤリ、と笑っている狩谷の顔だった。
「な、何がですか？」
おそろおそろそう尋ねてみる。
そんな太郎に、狩谷は悪(いた)戯(ずら)っぽく目を細くして、こう言った。
「これから俺はもう一度『外』に出る。お前もついてこい」
「え!？」
長い前髪とメガネで隠れている太郎の目が、ギョッと見開いたのだが、果たしてそれが狩谷に見えたかどうか。

本文 p13～18 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>